脱政治化という〈性の政治〉
――村上春樹「偶然の旅人」を読む――

黒岩裕市

1. クィア理論の動向と「新しいホモノーマティヴィティ」

わたしはこれまで日本近代文学における男性同性愛表象を分析し，その変遷をたどることを行なってきました。特に精神医学や性欲学の見解と文学表象との関連性について考察しました。イヴ・コゾフスキー・セジウィックの言葉を借りれば，一方では同性愛をある特定の人物にマイノリティ化する精神医学や性欲学の見解が文学表象にとり込まれる過程を，もう一方では文学表象において同性愛が特定の人物に限定されずに拡散し，普遍化する過程を詳らかにすることを試みました。マイノリティ化の見解と普遍化の見解の衝突やせめぎ合いを読みの軸に据えたということになります。

それでは，現代の日本文学の男性同性愛表象の特徴や問題点はいかなるものでしょう。こうした問いを立てた時，頭に浮かんだ作品の一つが村上春樹の「偶然の旅人」という短編でした。本報告ではこの作品を取り上げてみたいと思います。なお，今回注目する論点は村上春樹のほかの作品にも見出せるものかもしれませんが，ひとまずは「偶然の旅人」の男性同性愛表象に絞って報告します。

作品の読みに入る前に，まずはクィア理論の近年の動向を概観することから始めたいと思います。

2013 年に発表された，クィア理論やクィア・スタディーズの動向や現在の課題に関する論考で，清水晶子は，1990 年代初頭の創成期のクィア理論に「奇妙なたたずまいやふるまいに特徴づけられた奇妙な身体と，奇妙な効果をもたらす奇妙な読み」の絡まり合いを指摘します。それは，セジウィックの言葉によれば，マイノリティ化の見解と普遍化の見解との「終わることのない交渉の場」ということになるのですが，しだいにそうした絡まり合いから「「奇妙な身体」が特定の安定した輪郭をもつマイノリティ身体へと還元されていくのと同時に，その輪郭それ自体に奇妙な形で介入する「読み」の試みが後景化されてきた」と清水は述べます。こうした状況に対して，2000 年代以降のクィア理論やクィア・スタディーズは「包摂される身体とそうではない身体との区分け自体の奇妙な読み直しへと，再びその焦点をうつすこと」になりました（清水 2013, 216-218）。

このような読みなおしを試みた人物としてリサ・ドゥガンの名前が挙げられます。ドゥガンは 2003 年の著作で，90 年代中盤以降，特に 2001 年の 9.11 以降，合衆国のゲイ団体が新自由主義的なレトリックを採用するようになり，結婚（同性婚）や軍隊に組み込まれることへの要求が強まったことを指摘します。その代表的な団体が Independent Gay Forum（IGF）です（ドゥ

ガンによれば，IGFのウェブサイトに名前があるのは30人の男性と3人の女性で，1人のアフリカン・アメリカンの男性以外は全員白人です)。IGFは「ゲイやレズビアンの市民社会への完全な包摂」を求め，その代わりとして，ゲイやレズビアンが国民生活の「創造性，たくましさ，品性」に貢献することを宣言します。

ドゥガンはIGFのような団体の「ネオリベラルな性の政治」を「新しいホモノーマティヴィティ［the new homonormativity］」と呼び，批判します。それはヘテロノーマティヴな前提や制度に対立するものではなく，むしろそれらを支え，補強し，「家庭と消費につなぎとめられた，私的化され脱政治化されたゲイ・カルチャー［a privatized, depoliticized gay culture anchored in domesticity and consumption］」の可能性を重視するものです。セクシュアリティを公的で政治的な問題とみなしてきたこれまでのゲイ・ムーブメントの戦略は放棄され，私的領域の自由が求められるようになりました。「家庭というプライバシー」や「「自由な」市場」，「愛国心」（軍隊への加入）といったものへのアクセスの権利の平等が主張されるようになったのです（Duggan 2003, 48, 50-51)。

ドゥガンが批判するような2000年代以降の合衆国の「性の政治」が同時期の日本にそのまま当てはまるわけではありませんが，本報告では，ドゥガンの指摘を手がかりとしながら，村上春樹（1949年～）の「偶然の旅人」を読むことを試みたいと思います。

2. 洗練された都市生活者としてのゲイ男性

「偶然の旅人」は，『新潮』2005年3月号に連作「東京奇譚集」の第一作として発表された作品です。同誌に掲載されたほかの三作品と書き下ろし一作品を加えて，同年9月に『東京奇譚集』というタイトルで一冊の本として出版されました。そのタイトルが示すように，テクストの言葉に従えば，「不思議な出来事」がこれらの作品の主題になるのですが，「人生を変えた不思議な出来事」ではなく，「とるに足りない，些細な方の体験」に光が当てられることになります（pp.9, 11)。

最初に「偶然の旅人」のあらすじを確認したいと思います。「偶然の旅人」とは，「この文章の筆者」（p.9）であるという「僕」が，「彼」と呼ばれる知人の遭遇した「偶然に導かれた体験」（p.17）を聞き，語るという体裁をとっています。火曜日の朝，「彼」は郊外のショッピング・モールのカフェでディケンズの『荒涼館』（1852～53年）を読んでいました。すると，隣の席の女性も同じ本を読んでいます。この「不思議な巡りあわせ」（p.26）をきっかけに「彼女」と交流を持つようになった「彼」は，翌週，「彼女」に「静かなところ」（p.29）へと誘われます。「彼」はその性的な誘いを断るのですが，そうすると，「彼女」は「あさって」に乳癌の再検査をひかえていることを「彼」に打ち明けます。「彼女」は商社に勤める夫にもそのことを言えずにいたといいます。その時目にした「彼女」の耳たぶのほくろが引き金になり，「彼」は同じ場所にほくろのある姉のことを不意に思い出します。「彼」と姉は仲違いをし，十年以上も疎遠になっていました。その姉に連絡し，再会すると，姉も「あさって」に乳癌の手術をするといいます。以上のような「偶然」を通して，最終的に「彼」は姉と和解することになります。その「彼」がゲイ男性であるという設定なのです。

「彼」が「彼女」の誘いを断る際に，「僕は同性愛者なんです」（p.30）と「彼」のゲイネスが持ち出される点，また，「彼」と姉の仲違いの原因が「彼」のカミングアウトとそれに続くアウティングにあったということはあるのですが，物語の主題となる「偶然に導かれた体験」そのものに対して，この「彼」がゲイ男性である必然性はありません。しかし，そうであるからこそ，テクストで「彼」のゲイネスがいかに表象されるのかは興味深い論点になると思われます。

まずは「偶然の旅人」から，「彼」のことを紹介する部分を二箇所抜き出してみます。

> 彼はピアノの調律師をしている。住まいは東京の西，多摩川の近くにある。41 歳でゲイである。自分がゲイである事実をとくに隠してはいない。三歳年下のボーイフレンドがいるが，彼は不動産関係の職についており，仕事の都合上カミングアウトができない。だから二人は別々に暮らしている。調律師ではあるけれど，音楽大学のピアノ科を出ているし，ピアノの腕も捨てたものではない。ドビッシーやラヴェルやエリック・サティーといったフランス音楽をなかなか上手に，味わい深く弾く。彼がいちばん愛好しているのはフランシス・プーランクの曲だ。（p.18）

> 彼は一人暮らしのゲイとして，それなりに満ち足りた生活を送っていた。身なりが良く，親切で礼儀正しく，ユーモアのセンスがあったし，ほとんど常に感じのいい微笑みを口元に浮かべていたから，多くの人々は――生理的に同性愛者を毛ぎらいする人を別にすればということだが――彼に自然な好感を持った。仕事の腕は一流だったので，多くのクライアントがつき，収入も安定していた。有名なピアニストが彼を指名することもあった。大学町の一角に 2 ベッドルームのマンションを購入し，そのローンの返済もおおむね終わっていた。上等なオーディオ装置を持ち，自然食の調理に精通し，週に五日はジムに通って贅肉を落とした。何人かの男たちとつきあったのちに，現在のパートナーと巡り合ってもう十年近く，穏やかで不満のない性的関係を維持している。（p.22）

都市生活者のゲイ男性である「彼」は「それなりに満ち足りた生活を送っていた」といいます。「彼」はピアノの調律師をしており，非常に洗練された人物として設定されています。その仕事を通じて「僕」とも知り合いました。聴き取る能力にすぐれた「彼」は，その腕の良さから収入も安定し，住居，音楽，食事，ジムと大いにこだわりを持ちながら，消費活動に勤しんでいます。

また，「彼」には三歳年下のパートナーがいます。専門職の「彼」とは異なり，カミングアウトが難しい状態にあります。職種がゲイ男性の生活に及ぼす影響もテクストには書き込まれているのですが，いずれにせよ，十年近く続いたという二人のパートナーシップは安定しているようです。特に「穏やかで不満のない性的関係」という表現からは，かれらの関係が乱交からも遠く，異性愛主義的な社会が理想とするモノガミーを前提とした婚姻関係に近いものであることが感じられます。こうした「彼」の表象のされ方にドゥガンが指摘する「新しいホモノーマティヴィティ」を見出すのは難しくはないでしょう。

なお，「彼」はこれほどこだわりを持って生活しているわけですが，それでも「それなりに満

ち足りた生活」，すなわち，何かが足りない段階にあるといいます。姉との和解の後，「もっと自然に生きることができるようになった」（p.47）と「彼」が述べているので，このテクストでは経済的なことよりも，本当の自分を探し，見つけることに重きが置かれていることがうかがえます。もちろん，お金では買えない「何か」の意義を否定するつもりはありませんが，すでに経済的に十分に安定している「彼」がそうした振る舞いをすることで，テクストでは経済の問題が後景化され，隠蔽されることになるのではないでしょうか。三浦玲一は，新自由主義体制下の社会や文化の特徴の一つとして「（富の）再分配を目標とする政治から（アイデンティティの）承認を求める政治への移行」を挙げ，村上春樹の『1Q84』をこの文脈で分析しているのですが（三浦 2014, 40），「偶然の旅人」のゲイ男性の表象もこうした動きに当てはまるものであると考えられます。

また，性的に安定したゲイ・カップルの表象以前に，そもそもこの作品ではゲイ男性のセクシュアリティは不可視化されています。「僕」は「彼」と大学時代のガールフレンドとの異性間の性行為については言及するのですが，「彼」と男性との性行為に関してはいっさい触れません。「僕」は話がそこに及びそうになると，「しかしあるとき……いや，でもこの話はやめよう。話し出すと長くなるし，この物語に直接関係のないことだからだ」と露骨に中断します（p.21）。もっとも，これは「彼」の「人生を変えた不思議な出来事」のほうかもしれず，それを語らないのは冒頭で宣言されたとおりなのですが，そうした物語の枠組みそのものがゲイ男性の脱性化を促進しています。

竹村和子は，エロスを無化したうえで，「商品＝記号として循環するゲイネスは，〔ヘテロ〕セクシズムの抑圧構造をおおいかくす暗幕にすぎない」と論じているのですが（竹村 2002, 83），「偶然の旅人」のゲイ男性の表象も，このような「暗幕」として機能してしまうものだと思われます。その一方で，「彼」と「彼女」や「彼」の姉との間には，性器的なセクシュアリティには還元されない，触覚的なエロティシズムが漂っています。ただしそれはあくまでも「彼」と女性との異性間で発生するもので，ホモエロティシズムは明確なゲイ男性のキャラクターを通して皮肉にも抹消されることになります。

3.「脱政治化」のプロセス

さて，ドゥガンは「ネオリベラルな性の政治」である「新しいホモノーマティヴィティ」の特徴として「家庭と消費につなぎとめられた，私的化され脱政治化されたゲイ・カルチャー」を重視することを挙げています。続いて，本報告でも「偶然の旅人」の「彼」の表象から「脱政治化」の問題を考えてみたいと思います。

作品の前半で，「彼」は大学時代に「あることが起こり，自分が紛れもなくホモ・セクシュアルであるという事実を［…］発見した」といいます。そして，「彼」は当時のガールフレンドにもその「発見」を打ち明けました。ところが，話はそこで終わらずに，いつの間にか「まわりのほとんどすべての人間が，彼がゲイであることを知るようにな」り，「その話は回りまわって家族にも伝わ」ることになります。そのことが「彼」の家族に「波風を立て」，二歳年上の姉が

間近にひかえていた結婚話も危うく破綻しそうになりました。結局，姉は結婚するのですが，「彼」と姉の間のそれまでの「親密さ」は損なわれ，断絶が生じてしまいます（pp.21-22）。

作品の後半では，姉との仲違いの経緯と和解に焦点が当てられることになります。二人が仲違いに至った理由としては，次のようなこともあったといいます。

> 姉の結婚話がもつれたとき，興奮状態の中で，口にすべきではないことをお互いが口にしてしまったというのも，その理由のひとつだった。姉が結婚した相手が彼の気に入らなかったというのも理由のひとつだった。その男は傲慢な俗物であり，彼の性的傾向をまるで不治の伝染病のように扱った。どうしてもやむを得ない場合は別にして，その男の 100 メートル以内には近寄りたくなかった。（pp.36-37）

つまり，姉の結婚相手は「彼」のセクシュアリティを「不治の伝染病」としてとらえ，その伝染を避けるために姉との結婚にも躊躇したというのです。

ゲイ男性，あるいは，男性同性愛を「不治の伝染病」とみなすことは深刻なホモフォビアに他ならないのですが，ある時期，男性同性愛はあからさまなまでに「不治の伝染病」と結びつけられて考えられていました。それはもちろん，1980 年代のエイズ・パニックの時代です。姉の結婚相手の態度は「彼」が大学生の頃のものであるとも考えられます。「偶然の旅人」の背景となる時代は特定できないのですが，物語の現在を作品が出された 2005 年頃と仮定すれば，「彼」の大学時代は 1980 年代中盤に相当します（ただし，ヴィンセント・風間・河口『ゲイ・スタディーズ』が指摘するように，男性同性愛を病気と死，感染のイメージで語ることはエイズの出現以前から見られるもので，エイズの表象はそうしたステレオタイプを援用したものに他なりません（ヴィンセント他 1997, 127））。

1980 年代中盤には新聞でも男性同性愛者をエイズの感染源とみなすような報道がなされていました。たとえば，1985 年 10 月 24 日『毎日新聞』の「同性愛者の献血お断り」という記事は，「国内で新たに男性同性愛者のエイズ（後天性免疫不全症候群）患者三人が認定され」，「本格的なエイズ汚染に巻き込まれる危険が高まっている」ため，問診チェックの強化によって男性同性愛者に献血をさせないことを厚生省が通知したという内容のものです。ここでは男性同性愛者が「エイズ・ハイリスク（危険性の高い）グループ」として位置づけられているのですが，HIV に感染しやすい危険な状態に置かれている人ということではなく，「エイズ汚染」の危険な感染源と考えられています。感染するのは HIV というウイルスなのですが，男性同性愛というセクシュアリティやゲイ男性という人物が病理化され，あたかも「伝染病」の感染源であるかのように語られているのです。そうなると，「偶然の旅人」の「彼」が述べるように，「傲慢な俗物」であったため，姉の結婚相手がゲイ男性のセクシュアリティを「不治の伝染病」とみなしたというよりは，当時の一般的な新聞までもが，そのような見方を先導していたということになります。

このように，1980 年代にはエイズという現象によって男性同性愛者へのホモフォビアが強化されたのですが，風間孝は，そのことをそれまでの日本では隠蔽化されていたホモフォビアが

顕在化したととらえ，その結果，男性同性愛者は「否応なく自分たちの同性愛という性的指向を一つの個人的な「趣味」や性行動としてだけではなく，一つの政治的な問題として考える方向に進」み，「自分のうちにも内面化され，社会において構造化されているホモフォビアと闘っていく」という政治化の契機が得られたといいます（風間 1997, 405, 420）。つまり，ゲイ男性のセクシュアリティという従来は「個人的」とみなされていたことを「政治的な問題」として，言い換えれば，〈個人的なことは政治的なこと〉としてとらえなおすきっかけが生じたのです。

それでは，「偶然の旅人」の「彼」はどうでしょう。「彼」は，姉と和解した後の後日談として次のように語ります。これは「彼」の発言としてテクストに組み込まれています。

> 「甥や姪ともすっかり仲良くなりました。姪にはピアノを教えてもいます。僕が言うのもなんだけど，けっこう筋はいいんですよ。姉の夫も実際につきあってみると，思っていたほど嫌なやつではありませんでした。もちろん傲慢なところがなくはないし，いささか俗物ではあるんだけど，一生懸命働いていることは確かだし，何よりも姉を大事にしてくれます。それにゲイは伝染性のものではないし，甥や姪にもうつらないんだということをようやく理解してくれました。それはささやかだけれど偉大な一歩ですよね」（p.46）

「不治の伝染病」というホモフォビックなゲイ男性のイメージを，姉の夫個人の資質を越えて，「政治的な問題」として「彼」が考えなおすことはないのです。顕在化されたホモフォビアは再び曖昧化され，あたかも〈個人的なことは個人的なこと〉であるかのように，姉の夫の理解を得たことで片づけられます。「政治化」の契機はテクストに持ち込まれつつも失われるのであり，本報告では「偶然の旅人」のそうした展開に「脱政治化」という「性の政治」を指摘します。

しかもその過程では，姉の夫が一生懸命働く＝稼ぐことと，異性愛家族を円満に維持していることが評価されています。かつての「彼」のカミングアウトやそれに伴ったアウティングを「彼」の過失であるかのように解釈した異性愛家族への批判的な眼差しは見出せないのです。それどころか，現在の「彼」は，異性愛家族制度をまったく脅かすことはなく，たとえ次世代再生産に直接関わることがなくても，甥や姪といった世代の子どもたちとも友好な関係を築くことができる善良な家族の一員という位置に置かれるのです。たとえそれが異性愛家族において周縁的な位置であったとしても。

小説の後半では，和解をした姉との会話のなかで，「ピアニストになるのをあきらめ」たことや「自分がゲイだと気づいた」ことによって，かつての「彼」が「すごく怯えていたし，怖くてたまらなかった」，「世界からずり落ちていくような気がした」ということが明かされます（pp.40-42）。「ほとんど常に感じのいい微笑みを口元に浮かべてい」るという現在の「彼」の生き方は，そうした危機を乗り越えた結果，「ベテランのゲイ」（p.35）として「彼」が習得した処世術であることもうかがえます。

しかし，その処世術とは，最終的には「彼」を「ずり落」とそうとした家族や社会への問いなおしではなく，そこに包摂されることを目指すものに他なりません。「ほとんど常に感じのいい微笑みを口元に浮かべ」ることが（しかも「彼」自身の主体的な行ないとして）求められる

こと，しかしそれでも「生理的に同性愛者を毛ぎらいする人」には通じないということそのもの，すなわち，「社会において構造化されているホモフォビア」を「彼」自身が批判的に見なおす気配はありません。

4. ゲイ男性のホモノーマティヴな表象がもたらすもの

最後にこのようなゲイ男性のホモノーマティヴな表象が「偶然の旅人」のなかでいかなる効果をもたらすのかについて考えてみたいと思います。

そもそも「偶然の旅人」で語られる「彼」の「偶然に導かれた体験」とは女性とのカフェでの出会いが発端となっています。「静かなところ」に誘われた「彼」は「僕は同性愛者なんです」と告げたのでした。そのことは「彼女」に「ショック」をもたらすものです。それは「なにしろ同性愛者に出会ったのは，彼女の人生で初めての体験」であるためで，「彼の説明の趣旨が相手にじゅうぶん理解されるまでに少し時間がかかった」のです。また，「彼女のたかぶり」の背景には乳癌の再検査をひかえていたことも推察されます。

そうした「彼女」の反応に対して，「彼は長い五本の指で，彼女の髪を優しく，時間をかけて撫で続け」ます。「彼」には「彼女」が受けた「ショック」や，さらには，「彼」への誘いの要因となった乳癌への恐怖を緩和する役割が割り振られているのであり，実際に「彼」はそれをうまくこなします。「彼女」を癒すには，「彼女」が当初想定していた男性との性行為よりも，髪を優しく撫でるといった身体的な接触から生じる「親密さ」のほうが効果的であるということを「彼」が「彼女」に教えているかのようです（pp.30-31）。

一方，「彼」のエピソードを聞いた「僕」は自身が経験したジャズにまつわる「不思議な出来事」とも関連づけつつ，「ジャズの神様だかゲイの神様だかが――あるいはほかのどんな神様でもかまわないのだけれど――どこかでささやかに，あたかも何かの偶然のようなふりをして，その女性を護ってくれていることを，僕としては心から望んでいる。とてもシンプルに」（p.49）とテクストを締めくくります。

しかしながら，「ゲイの神様」なるものが存在するとして，果たしてそれは「女性を護」るものでしょうか。確かにこのテクストの「彼」というゲイ男性には「彼女」を癒す役割が与えられていました。しかしそのためには，「彼女」が同性愛の存在さえも考えたこともないほどヘテロセクシズムを内面化し，その結果として「彼」のカミングアウトから大きな「ショック」に陥り，かつ，「彼女」の身体が乳癌の危険性に晒された状態に置かれていることが前提になります。「彼」の姉にしても同様かもしれません。そうであれば，このような前提のもとで，「ゲイの神様」について気軽に言及する（このフレーズを最初に口にしたのは「彼」なのですが），語り手の「僕」に改めて目を向ける必要がありそうです。

語り手の「僕」については，作者と同じ「村上」という名前の男性の作家で，ジャズ好きで，既婚者であるということぐらいしかわかりませんが，フランスの作曲家であるフランシス・プーランク（1899 ～ 1963 年）について「プーランクはゲイでした。そして自分がゲイであることを，世間に隠そうとはしませんでした」という「彼」の言葉を聞いても，「僕もプーランクの音楽は

昔から好きだ」と応じるような人物として表象されています（pp.18, 19）。「彼女」や「彼」の姉のような女性が性規範に強く束縛された存在として表象されるのとは対照的に，「僕」は「彼」のゲイネスに柔軟に対応し，偏見も抱いていないような寛容なヘテロセクシュアル男性であることがほのめかされています。ここに，性規範に縛られた女性を引き立て役にするかのように，寛容で柔軟なヘテロセクシュアル男性の「僕」と口当たりのよいゲイ男性の「彼」との男性同士の（しかも新自由主義体制のもとで特権化されるクリエイティヴな男性同士の）友好な関係が浮かび上がってきます。

しかしながら，包摂と排除という点から考えてみれば，寛容な「僕」と友好な関係を結ぶゲイ男性には，厳しい条件が課されています。というのも，「僕」の寛容性とは，「彼」に付与された，洗練されたイメージがあってはじめて成立するものだからです。しかも，「ゲイは伝染性のものではない」ということに立脚しつつ，「彼」が「僕」の性や生のあり方を揺さぶったり，脅かしたりすることがいっさいないということが前提となっています。言い換えれば，ゲイ男性である「彼」との間にホモエロティックな欲望が拡散することはなく，「彼」によって「僕」がホモセクシュアル・パニックにも陥らないということが暗黙の了解になっているのです。その結果，ヘテロセクシュアル男性の自明性や中心性は問われることもなく温存されます。

一方で，もしも「彼」が洗練されたイメージを持たず，「僕」の性や生を脅かすようなゲイ男性であったならば，「僕」のような人物が友好な関係を築くことはあるでしょうか。その可能性は小さいと思われます。「僕」が受容できないゲイ男性は「僕」の目には映っておらず，あらかじめ排除されているようです。あたかも「僕」の寛容性や柔軟性を担保するために，ゲイ男性のホモノーマティヴな表象が持ち出されているかのようにも感じられます。

以上，「新しいホモノーマティヴィティ」を手がかりに「偶然の旅人」を読んでみると，「脱政治化」のプロセスや包摂と排除といった問題が明らかになってきます。そうした意味で（さらには，現代の日本文学を代表すると考えられる作家の作品のなかにゲイ男性のホモノーマティヴな表象がとり込まれ，流通しているという点を踏まえますと），現在の日本の「性の政治」について考える際に，「偶然の旅人」は有益なテクストになるのではないでしょうか。

＊本稿は，2015年1月9日～10日に立命館大学で開催された国際コンファレンス「クィア理論と日本文学」における発表原稿です。当日，会場で多くの貴重なご意見をいただいたことに感謝申し上げます。なお，本稿に基づいた論考が拙著『ゲイの可視化を読む――現代文学に描かれる＜性の多様性＞？』（晃洋書房，2016年10月）に収録されています。本稿とあわせてご参照いただけますと幸いです。

【引用文献】

Lisa Duggan, *The Twilight of Equality? : Neoliberalism, Cultural Politics, and the Attack on Democracy*. Beacon Press, 2003

風間孝「エイズのゲイ化と同性愛者たちの政治化」『現代思想』1997年5月臨時増刊

三浦玲一『村上春樹とポストモダン・ジャパン――グローバル化の文化と文学』彩流社，2014年

村上春樹「偶然の旅人」『東京奇譚集』新潮文庫，2007年［本文中には頁数のみを記載］

清水晶子「奇妙な身体／奇妙な読み――クィア・スタディーズの現在」『現代思想』2013 年 1 月号
竹村和子『愛について――アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店，2002 年
キース・ヴィンセント・風間孝・河口和也『ゲイ・スタディーズ』青土社，1997 年